



塩の湖（トルコ、アダナ南）／撮影 久米 崇

サテライトシンポジウム

塩の文明誌

S a l i - g r a p h y

2006年11月11日（土）・12日（日）

総合地球環境学研究所 講演室

第1部 塩と文化

11月11日（土）13:30～17:00

講演（日本語）

片平 孝（写真家）、高梨浩樹（たばこと塩の博物館学芸員）、
岸本雅敏（考古学者）、奥村彪生（伝承料理研究家）

第2部 塩と環境

11月12日（日）10:00～16:00

講演（英語）

前川和也（国士舘大学）、伊藤敏雄（大阪教育大学）、
S. Kapur（トルコ・チュクローヴァ大学）、J.M. Beltran（イタリア・FAO）

聴講無料

主催：地球研 佐藤・渡邊・長田プロジェクト

申込・問合せ先

〒603-8047 京都市上賀茂本山457-4

総合地球環境学研究所 佐藤プロジェクト「塩の文明誌」事務局

TEL: 075-707-2383 FAX: 075-707-2508 Email: sato@chikyu.ac.jp

サテライトシンポジウム

塩の文明誌

S a l i - g r a p h y

今日、私たちをとりまく環境問題の1つに、塩が引き起こす問題がある。砂漠緑化の試みを阻み、さらなる砂漠化の進行をうながす要因としての塩害はつとに知られるところである。乾燥地での灌漑農業における塩害はことに深刻で、持続的な農耕活動を行う上で重大な障害になっている。この問題は、人間が農業をはじめて以来たえず直面してきた問題でもある。議論の分かれるところではあるが、古代メソポタミアでは、長年にわたる灌漑がもたらした塩害により食糧生産が不可能になり、ついには文明の崩壊に至ったとも言われている。

一方で塩は人間にとって害をなすだけでなく、生きていく上で欠かすことができないものでもある。「塩梅(あんばい)」の言葉を持ち出すまでもなく、わが国の豊かな食文化のひろがりには実に塩の使いようがベースになっている。また、命の糧としての塩を獲得するために、洋の東西を問わず古来より人間は、文化的にも社会的にも様々な工夫をこらしてきた。塩の生産のままならない地域では、塩は財貨に匹敵し、ときに命がけで運搬され、ときに戦争の引き金ともなってきた。

このように塩は、文明・文化の盛と衰に関わるものであるといえるだろう。当シンポジウムでは人と塩とのかかわりを軸に、歴史、文化、環境問題など多彩な視点で講演をしていただく予定である。